Geo-space Engineering Center

GEC ニュース

第 230 号/2008.11

Index

■ENAA 設立 30 周年　記念式典　開催報告
■平成 20 年度　国内見学会　報告
■CCS ワークショップ 2008　開催報告
　～CCS 技術開発の現状と課題～
■新任のご挨拶
■会員の皆様へのお知らせ
□第 312 回サロン・ド・エナ開催のご案内

(財)エンジニアリング振興協会
地下開発利用研究センター
〒105-0003 東京都港区西新橋 1-4-6
TEL 03-3502-3671(代)／FAX 03-3502-3265
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞｱﾄﾞﾚｽ；**http://www.enaa.or.jp/GEC/**
E-mail ｱﾄﾞﾚｽ；**gec-adm@enaa.or.jp**

■ENAA 設立 30 周年　記念式典　開催報告■

増田会長　式辞

(財) エンジニアリング振興協会は、設立 30 周年を記念して平成 20 年 10 月 2 日(木)の 17 時から東海大学校友会館で記念式典を開催しました。

エンジニアリング功労者表彰は、エンジニアリング産業に関与し、その活動を通じエンジアリング産業の発展に著しく貢献したグループ(チーム)および、個人を表彰するものです。

増田 信行会長の式辞に続いて経済産業大臣のご祝辞を立岡 恒良製造産業局次長からいただきました。

引き続き、エンジニアリング功労者表彰式が執り行われ、はじめに、協会設立 30 周年を記念して、エンジニアリング産業の振興と発展等に顕著な功績のあった 3 名に経済産業大臣賞および経済産業省製造産業局長賞の表彰が行われ、立岡製造産業局次長から表彰状授与がなされました。

受賞者の方々

受賞者は、次のとおりです。

◆経済産業大臣賞　　小林 秀夫 殿
　　(千代田化工建設(株))
　　同　　田中　弘 殿 (日揮(株))
◆経済産業省製造産業局長賞
　　野口　彰 殿 ((株)間組)

次に、グループ表彰 11 件［国際協力 4 件、エンジニアリング振興 4 件、環境貢献 2 件、特別テーマ(中小規模のプロジェクト)1 件］、個人表彰 3 名［国際協力 1 名、エンジニアリング振興 2 名］ならびに、設立 30 周年を記念して、当協会活動に多大な貢献をされた協会功労者 16 名に対して、増田会長から賞状および副賞が渡されました。

受賞者を代表して、経済産業大臣賞を受賞された田中 弘氏(日揮(株))が謝辞を述べられ、出席者の皆様から暖かいお祝いの拍手をいただき、本式典は、

終始厳粛な内にも和やかな雰囲気で執り行われました。

特に、地下開発利用研究センター関係では、協会功労者として、二酸化炭素地中貯留技術研究開発でご尽力いただいた佐藤 光三東京大学大学院教授とともに地下空間利用に関して、長きにわたってご貢献いただいた佐藤 亘氏(東京電力㈱電力流通本部送変電建設センター西上武幹線中之条事務所副所長)および、八田 敏行氏(清水建設㈱技術研究所副所長)が栄えある受賞となりました。

式典終了後、設立 30 周年記念パーティが開催されました。パーティは、竹内 敬介理事長の挨拶、立岡製造産業局次長の来賓祝辞に続き、小島 圭二顧問(東京大学名誉教授、功労者選考委員会委員長)による乾杯の音頭で始まりました。

経済産業省、関連団体、会員企業の方々約 350 名が参加され、当協会の 30 周年を祝賀していただき和やかで盛大なパーティとなりました。

■ 平成 20 年度 国内見学会　報告■

参加者一同（フェニックス研究所前にて）

核融合科学研究所　実験施設

平成 20 年度国内見学会は、10 月 16 日(木)から 17 日(金）の 2 日間で JR 名古屋駅からバスで移動し、最初の見学地、瑞浪超深地層研究所を皮切りに、以下の 4 施設を見学致しました。

地下施設に関しての新たな知見を得るとともに参加者相互の交流を深めることができました。

１日目

□東濃地科学センター　瑞浪超深地層研究所

瑞瑞浪超深地層研究所は、(独)日本原子力研究開発機構(JAEA)が、高レベル放射性廃棄物の地層処分研究開発の基盤として、地表から地下約 1,000m程度までの深地層の科学的研究(地層科学研究)を行う目的で岐阜県瑞浪市に設置された研究施設であり、深さ 1,000m 程度の立坑や水平坑道などを掘削し、主に花崗岩を対象として断層および割れ目の性状や分布、地下水の流れや水質、岩盤の強さなどを調べています。また、地下深部の坑道を安全かつ合理的に設計・施工し、維持・管理するための研究開発を行っています。今回は、坑道内の見学は出来ませんでしたが、坑道掘削の最新状況をスライドとビデオで説明いただき、掘削用装置の地上部分を見学する事が出来ました。事業活動による環境負荷に関して、法律に基づく測定データをインターネットで公開するなど安全管理と環境管理に対して万全を期しているという印象を受けました。

２日目

□核融合科学研究所

（大学共同利用機関法人自然科学研究機構）

核融合科学研究所では，大型ヘリカル装置(LHD)で，高温高密度プラズマを生成し，将来，核融合炉を実現するために必要な学術的基礎研究を行っています。見学当日は、核融合炉が作動中のため、その巨大な核融合装置を見学することはできませんでしたが、核融合実験の様子を伝える映像と実験装置のモデルによって、その一部を垣間見ることができました。

□㈱日本無重量総合研究所

㈱日本無重量総合研究所は、地震・地上の災害等の影響が少なく、外界からの影響をほぼ完全に遮断した精密な地下空間を利用して、従来から宇宙空間、

ＧＥＣニュース　2008. 11

航空機、小型ロケット等で行われている無重量実験を、きわめて身近に、安価に、かつ継続的に行う目的で岐阜県、土岐市、民間の出資による第３セクターとして設立されました。

無重量実験装置

当日は、無重量実験装置の実物と無重力下での興味深い実験の様子をビデオなどで見学することができました。

□ヤマザキマザックオプトニクス㈱
フェニックス研究所

フェニックス研究所は、世界にも類を見ない規模の完全地下工場です。地上にはルーブル美術館を思わせるピラミッド状の入り口と通用口、通気用ダクトのみが存在しています。見学に際して、フェニックス研究所・総務経理部長の奥田様より、地下工場を建設するに至った経緯と、恒温・恒湿性、気密性といった地下の優れた特性によって得られる省エネなどの経済効果について丁寧で分かり易い説明をしていただきました。地下で勤務する従業員の皆さんのお話しもあり、地下での勤務の方が地上より快適であるとの声や花粉症の症状も軽くなることということもお伺いして参加者は一様に驚いていました。

こうして平成 20 年度国内見学会は、天候にも恵まれ、無事終えることができました。今回は、日本の科学技術の最先端を担う施設を身近に見学して、新たな知見を得ることができ、大変有意義な見学会となりました。

最後になりましたが、見学に際して、貴重な時間を割いて熱心な対応をしていただいた関係者の皆様へ、この紙面をお借りして心よりお礼を申し上げます。

■CCS ワークショップ 2008　開催報告■

～CCS 技術開発の現状と課題～

CCS ワークショップ 2008 が、平成 20 年 9 月 26 日(金)ホテルグランドパレス 2F「ダイヤモンドルーム」にて盛大に開催されました。これは、(財)地球環境産業技術研究機構(以下 RITE)が主催し(財)エンジニアリング振興協会の共催で実施されたものです。RITE 副理事長・研究所長　茅　陽一氏の開会挨拶に始まり、490 名の熱心な聴衆を集めて開始されました。

基調講演として、先ず経済産業省　地球環境技術室室長　三橋　敏宏氏の「日本の二酸化炭素回収・貯留(CCS)技術の実用化に向けて」と題した講演があり、その後、海外招聘者講演として、AK(Tony) Booer 氏の「CCS の世界動向について」の基調講演と続きました。

基調講演　経産省 地球環境技術室室長 三橋 敏宏氏

午後には、Rachel Crisp 氏による「英国での CCS の取組みについて」の講演後、Dennis R Van Puyvelde 氏が、「豪州での CCS 実証プロジェクトについて」と題した講演をされ、英国とオーストラリアも、実証に向けたプロジェクトがいよいよ本格化することが窺える内容でした。

引き続き、「アブダビでの CCS-EOR の紹介」と題した Bader Saeed Al Lamki 氏の講演となりました。最後の講演は、今注目を浴びる日本 CCS 調査株式会社の阿部　正憲氏の「CCS調査会社の発足と事業計画の紹介」があり、日本の CCS も実証に向けて新たな一歩を歩み始めたことを実感させるものでした。

このワークショップの講演では、興味深い話題が随所にあり、活発な質疑もあって大変有意義なワークショップとなりました。最後に、RITE 専務理事　本庄　孝志氏が閉会挨拶され、盛会のうちに終了となりました。

■新任のご挨拶■

太神（おおが）　敏行（としゆき）（技術開発第二部　研究主幹）

平成 20 年 10 月 1 日付けで、技術開発第二部にお世話になることになりました、　太神(おおが)と申します。出向元は、株式会社コマツです。入社以来、営業一筋で邁進してきました。

着任する前日までは、地盤改良機の市場導入に向けた営業に専念し、全国各地を飛び回っておりました。営業で培った経験を活かし、皆様方のご指導ご鞭撻を賜りながら、一日でも早く業務に慣れて、地下センターの発展に少しでもお役に立てるよう努力する所存です。至らぬ点も多々有るかと存じますが、皆様方、何卒宜しくお願い申し上げます。

（平成 20 年 10 月 1 日着任）

■会員の皆様へのお知らせ■

□第 312 回サロン・ド・エナ開催のご案内

日　　時：平成 20 年 12 月 17 日(水)17：30～20:00　（於：当協会 6 階 CDE 会議室）

テーマ　：**「新型インフルエンザ･パンデミックス(大流行)と BCP(事業継続)対策」**

講　　師：茂木　寿　殿　　東京海上日動リスクコンサルティング株式会社

危機管理グループ　グループリーダー　主席研究員

講演趣旨：　新型インフルエンザは、昨今、新聞･雑誌等で広く掲載され、国民的関心事となってきている。かつて、新型インフルエンザであったスペインインフルエンザ(スペイン風邪：1918 年)は、4,000 万人以上が死亡し、11 ヶ月で世界を席巻したと伝えられている。当時に比べ現在は、人口の増加や都市への人口集中、交通機関の発達により新型インフルエンザが地球のどこで発生しても、より短期間に大流行することが確実視されている。現在、H5N1 型鳥インフルエンザが、世界的な大流行を起こす新型インフルエンザに変異することが懸念されており、その大流行も秒読み段階に入ったとも言われている。今、日本で新型インフルエンザが大流行すれば、患者数 2,500 万人、入院患者 50 万～200 万人、死者 20 万～60 万人、経済損失 20 兆～80 兆円と想定されている。

一方、新型インフルエンザの大流行は、数ヶ月間継続するため、これが与える影響は局所的に発生する震災の比ではなく、社会機能や医療体制の破綻、死亡者の増加、経済的混乱、大流行終息後の復旧への影響などが容易に想像される。このようなことから国では、新型インフルエンザ対策を国レベル、地方自治体レベル、企業レベル、個人レベルに分けてガイドラインを設定して、啓蒙活動や体制整備を図っている。また、企業活動への影響も大きく、BCP 対策の観点や従業員の安全確保の観点から新型インフルエンザ対策への関心が年々高まっており、特に海外進出企業は関心度も高く、具体的な対策が強く要望されている。

これを踏まえて、講演においては、①新型インフルエンザの基本知識や基礎対策を始め、②企業において実施すべき対策を解説するとともに、エンジニアリング業界の共通関心事である③海外プロジェクトにおいて考えておくべき対策と課題についても言及致したい。特に、大型の海外プロジェクトの現場は、世界各国から労働者が集まり、新型インフルエンザ集団感染の絶好の温床とも考えられ、予想される脅威に対し、事前の計画をもって対処する以外の方法はないとの認識がまず重要である。海外プロジェクトのマネジャーや日本の本社において海外プロジェクトを監督指導支援する部門要員の方々には、リスク管理の対象として是非ともお聴き頂きたい。

（講演終了後、立食パーティーを行います。）

申込要領：ホームページまたは、FAX で事務局へお申し込み下さい。

地下開発利用研究センター　事務局　中村（TEL:03-3502-3671／FAX:03-3502-3265）